

夕才ル

芳田尚哉

「よし、これで荷物は片付いたかな」

広々とした部屋を見回す。だだっ広い部屋に、ベッドと収納ケースだけ。部屋の隅には段ボール箱。

ワンルームからの引っ越しの荷物なんか、たかがしれている。

「まさか、俺が一軒家に住めるなんて思ってもなかったよな。ど田舎だけど」

今までとはまるで別世界だ。実家だって、ここよりは狭い。

一〇年以上住んだワンルームマンションから、心機一転の引っ越しだ。庭付き一戸建てが格安だった。もちろん、事故物件ってわけじゃない。過疎の影響による空き家だ。昔ながらの平屋建てだけど、ちょっとリフォームすれば問題ない。

「さて、荷物も片付いたし、近所に挨拶でもしておこうかな」

都会生活だと適当だったけど、こういう場所じゃ近所付き合いはやっぱり重要だよな。定番の蕎麦も用意してある。

お隣さんに……とは言っても、少し歩かないといけない。こういう感覚は新鮮だ。本当に別世界だ。

人通りなんか全くない、舗装もされていない道を歩いてお隣さんの家に向かう。

両親ともに実家がそこそこの都会だったせいで、こういう場所って、テレビの向こう側の世界だった。

田圃や畑、遠くには山が見えるだけの景色を堪能しながら到着する。

ここも立派な家だ。垣根なんかそれっぽい。

「すみません」

見える範囲には誰もいないので、垣根越しに声をかける。庭が広く家まで遠いので、声が届かないようだ。

家の方からはギタンギタンと、なにか規則的な音がするので誰かいるはずだ。

「おじゃまします」

周囲を伺いながら中に入る。勝手に入って怒られたら、その時はその時だ。

「すみません」

音がする方に向かってもう一度声をかける。

「あいよ」

中からお婆さんの声が返ってきて、中から腰が曲がっているお婆さんが出てきた。

「おや？ 誰だい？」

お婆さんは不思議そうに俺を見る。初対面だから当然だ。

「初めまして。今日、隣の家引っ越してきました」

家の方を指して自己紹介をする。

「そうかい。あんたが……。よう来なさったな」

「あの、これ……」

手土産の蕎麦を渡す。

「こりゃあ、ご丁寧に。そうだ、ちょっとそこで待っとれ」

そう言って、よたよたとした足取りで家の中に戻っていく。

なんだろうと思いながら待っていると、なにかを持って戻ってきた。

「これ、使いんしゃい」

お婆さんが持ってきたのはタオルだった。真っ白いタオル。それも一枚や二枚じゃなく結構な量だ。

「あの、こんなに……？」

「タオルはな、この村の神様なんじゃ。みんな、それぞれに持っとるんじゃ。こりゃ、ちゃんと神様にお供えしたもんじゃ。あんたも大切に使いんさい」

「あ、ありがとうございます」

少し戸惑いながらもお礼を言って受け取り、この村について少し話を聞かされてから家に帰った。

挨拶に行ったら、大量のタオルをもらってしまった。田舎ってこんなものなのか？

受け取ったタオルを確認すると、タオルケットくらいの大きなものから小さなハンカチサイズのものまで、様々な大きさのタオルが何枚もあった。

しっかりとしたもので、触るとキシユキシユと音がするような感じだ。

「これって、デパートとかで結構な値がするんじゃないか？」

ここって別にタオルの名産地ってわけじゃなさそうだけど、品物はきちんとしたものだ。一人暮らしだったので、こういうものにこだわった事がないけど、これは使い心地が良さそうだとわかった。

「広いな、やっぱり」

ここでの生活にも慣れてきた頃、友人が引っ越し祝いという名目で飲みに来てきた。マンションだと騒ぐと近所迷惑になるが、ここはそんな心配はなさそうだ。隣までの距離がありすぎる。

「広すぎて落ち着かないんだよな」

「贅沢だな。庭付き一戸建てだろ。普通はないぞ」

「田舎だからな」

「だな。ほんとになんもないのな」

ここにはコンビニなんかもちろんない。スーパーもない。ちょっとしたものは、小さな雑貨屋があって、食材なんかは移動スーパーがあるくらいだ。といっても、それは最近らしく、少し前までは雑貨屋が全てだったらしい。

「でもさ、こんなところで仕事なんかあるのか？」

「なんとかやるさ」

「お前がいいならいいけどな。あのままだったら、本当に壊れそうだったし」

そう言いながら缶ビールをあおる。

心配してくれてたのは嬉しい。自分でも、あのままだとそうだったと思う。思い切って仕事を辞めて正解だったと思う。

「ここだったら、農業なんてのもいいんじゃないか？」

「そうかもな。それも考えてる」

「もしかしたら、お前ってそういう方が向いてるかもな」

友人は新しい缶ビールを開ける。

「ストレスはなさそうだしいいかも」

俺も次の缶に手を伸ばす。

営業の仕事は、毎日ストレスとの戦いだった。胃がキリキリして胃薬は必須だったし、そのせいで胃潰瘍にまでなった。

精神的にもボロボロで、医者からは鬱の一步手前だと言われた。

このままだと、さすがに命に関わりそうだったので、きっぱりと今までの生活を終えた。

残念なのか、よかったのか、一人だったのでフットワークは軽かった。病院通い以外は出費はほとんどなかったの、蓄えもそこそこあったのがよかった。

過疎化が進む村で、空き家に入居者を募集していた。しかもリフォームが必要だったのだが、その補助金が出るときたら、迷わず即決だった。

「ここって過ごしやすいぞ」

「まだ数日だろうが」

「それでもだよ」

都会とは違って、隣との距離は遠いが関係は近い。

若者が珍しいってのもあるだろうけど、村の人たちがなにかと世話をしてくれる。

こちらも自然と、顔を合わせると挨拶をするようになった。今までじゃ考えられない。

「おっと、なにか拭くもの拭くもの……」

友人がビールをこぼしやがった。

「おいおい、これでも新居だぞ」

「古い家だろ、いいじゃねえか。って、タオルがあるじゃんか」

リフォームしたから、外観以外はほとんど新しくなってるんだ……なんて言う必要はないか。

それよりも、友人が手を伸ばしているのは、あのお婆さんにもらったタオルだ。

「おい、それは……」

俺が止める間もなく、新品の真っ白いバスタオルで畳の上を拭く。

「ん？ あんなにあるんだし、一枚くらいいいだろ」

まるで俺がケチくさいみたいな言い方だが、そんな事じゃない。

タオルをもらった時、お婆さんから言われた事がいくつかある。

タオルには神様が宿っているので大切に使うこと。大切に使い、使い古されてきたら雑巾にして、徹底的に使いきること。

乱雑に扱えば神様の祟りがあるということ。

別に信心深いわけじゃなかったけど、この土地に馴染むために、言われた通り丁寧に扱って

きた。今までは洗濯なんか一週間に一回とか、もっとまとめてしたりだったけど、ここに来てからはタオルだけは毎日洗うようになった。

そんな俺の気も知らず、友人は畳を拭いている。

「悪い、これ洗っといってくれ」

ビールが染み込んだタオルを、ぺいっとこっちに投げてくる。

それを受け取ってタオルを見る。見事に汚れている。しかも、どうやったのか、少し破れている。

もちろん、タオルは汚れるものだからいい。だけど、これって大丈夫なんだろうか。でも、きちんと洗えば問題ないだろう。だけど、破れてるのは……。

「ああ、ホントに悪い。拭いてる時に膝で踏んでみたいでさ、引っ張ったら破れちゃった」

悪気なく言っているが、こっちは気が気じゃない。明日にでもお婆さんの家に行ってみるか。

破れたタオルは、汚れを落とすために水を入れた桶に入れておく事にした。

それからしばらく飲んで、夜も更けてきたので寝る事にした。もちろん友人は泊まりだ。

「風呂場広いし綺麗だな」

元々広いスペースに、リフォームをした時に最新式のものにしたので、家の雰囲気とは真逆だ。

「もう寝るわ」

まるで自分の家のようにくつろぎ方だ。そう言うなり布団に入って寝息をたて始めた。

「俺も寝るか」

思ったよりも疲れていたのか、スッと眠りに落ちた。

カサカサッ。

なにかが這うような音で目を覚ました。

なんなんだ？ 虫か？

沈み込むような眠気と戦いながら、ゆっくりと目を開ける。もちろん真っ暗なので見えないし、寝起きのせいで頭がぼんやりしている。

とりあえず体を起こそうとする……が、動かない。

もしかして金縛りか？

初めての経験だが、きっとこれがそうなんだろう。

カサカサとなにかが近付いている。

おい、と友人を起こそうとしたが声が出ない。友人はぐっすりと眠っているようで気付いていない。

カサッと白いものが見えた。虫じゃなさそうだ。

その白いものは友人に近付いていっている。

起きろ。

言いたくてもやっぱり声が出ない。

その白いものが友人に巻き付く。

そこでようやく目が慣れて、その正体がわかった。

タオルだ。

それはあの白いタオルだった。タオルが友人の右手に巻き付いている。

「うっ、うわっ！ なんだ、いてっ」

タオルは右手を締め付けているらしく、その痛みで友人が目を覚まして暴れる。しかし、タオルはますます締め付けているようで離れない。

俺が動けず見ているしかない。

「おい、助けてくれ。なんだ、これ」

すまん。

友人はなんとかしようとするが、タオルは離れない。

動けず見ていると、お婆さんの言葉が思い出された。

タオルを大切にしないと罰が当たる。

もしかしてこれがそうなのか。

そう思っている間に、グキッという音が響いて、友人の右手がだらりと力が抜けたようになった。

F i n o .

タオル

<http://p.booklog.jp/book/110248>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110248>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110248>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ